

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：27401

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13879

研究課題名（和文）Participatory Filmmaking as a New Pedagogy: Enhancing Active Learning and Global Competence

研究課題名（英文）Participatory Filmmaking as a New Pedagogy: Enhancing Active Learning and Global Competence

研究代表者

原 紘子 (Hara, Hiroko)

熊本県立大学・共通教育センター・准教授

研究者番号：00707870

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語圏での教育におけるアクティブ・ラーニングの浸透に鑑み、日本において、多様なバックグラウンドをもつ人々と協力する能力を涵養しグローバル人材の輩出に貢献しうるアクティブ・ラーニングを取り入れた新たな教育方法の提案を試みた。まず、アクティブ・ラーニングの促進およびグローバル・コンピテンスの涵養を目指す教育についての文献調査を実施した。次に、アクティブ・ラーニングの実践として共同映像制作プロジェクトを立ち上げ、大学生とともにショートフィルムを制作した。当プロジェクトでは、学生が協働して、英語と日本語を用いて国内外の幅広い観客層にメッセージを発信する映像作品が完成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の一環として制作されたショートフィルムは、イギリスでの対面形式の学会やオンラインで開催された国際学会で上映され、ビジュアル調査法を用いた新しい試みとして高評価を得た。また、共同映像制作は、それに携わった学生の満足度が高く、クリエイティブな活動を通して、学生自身に自国文化だけでなく他国の多様な文化についても気付きや発見をもたらす有効な教育方法となりうることが示唆された。本研究が示した高等教育における新たな教育方法は、グローバル人材の輩出に向けたアクティブ・ラーニングの促進とグローバル・コンピテンスの涵養に貢献しうると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the significance of practicing participatory filmmaking for advancing active learning and global competence in the university classroom and the impact of showing the produced films on the audiences. Collaborating with university students in Kumamoto for this study resulted in the production of the short films such as A New Normal for Our Future (2021), Colorful (2022), and Kumavel (Kumamoto+travel) (2023). In addition, I analyzed the data collected through interviews and surveys. The findings from this research project suggest that practicing participatory filmmaking contributes to the enhancement of active learning and global competence and the film screening connects the students conveying their message and the audiences responding and interpreting it diversely.

研究分野：教育学

キーワード：映像制作 filmmaking active learning global competence

1. 研究開始当初の背景

近年、教育におけるアクティブ・ラーニングの実践がグローバルなレベルでますます重要になってきている。英語圏の国々では、アクティブ・ラーニングの実践例やその効果についての研究が盛んに行われてきた (Bean, 2011; Meyers & Jones, 1993)。日本もその例外ではなく、文部科学省 (2013) は、グローバル化が進行する世界における教育には、課題の発見・解決や双方向型の学習などを含むアクティブ・ラーニングが不可欠であるとしている。さらに、文部科学省 (2014) は『平成 25 年度文部科学白書』において、アクティブ・ラーニングはグローバルマインドの涵養をもたらし、日本の発展を牽引しつつ世界的なシーンにおいても活躍するグローバル人材の輩出につながるとしている。

日本では、高等教育のさまざまな学問分野において、ディスカッションやグループ・ワーク、ピア・レビュー、プレゼンテーションなどを授業に取り入れることで、アクティブ・ラーニングが促進されてきた (Mizokami, 2007)。しかし、アクティブ・ラーニングによるグローバル・コンピテンスを高める教育方法としてのクリエイティブな活動、特に共同映像制作の意義については、ほとんど注意が向けられてこなかった。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では授業の中で行う共同映像制作に着目し、以下のリサーチクエストを設定した。

- ・大学のクラスルームで共同映像制作 (participatory filmmaking) はどのように実践され、その内容にはどのような特徴があるか。
- ・英語と日本語の 2 言語を用いた共同映像制作により、どのように学生のアクティブ・ラーニングが促進され、グローバル・コンピテンスが涵養されるのか。
- ・完成した映像作品を上映することにより、どのように観客のアクティブ・ラーニングが促進され、グローバル・コンピテンスが涵養されるのか。

ここでのアクティブ・ラーニングは、教員と学生に対し、一方的に知識を伝授する、または伝授される伝統的な指導・学習法を超えるよう促す教育手法である (Hara, 2018)。グローバル・コンピテンスは、異文化を理解・尊重しつつ、多様なバックグラウンドをもつ人々と協力できる能力を指す (OECD, 2018)。本研究では、上記の問いについて考察し、高等教育で活用することのできる新たな教育方法の実践例を示すことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、都市にはさまざまなバックグラウンドをもつ人々が協働できる「混成空間 (hybrid space)」が生まれると唱える Trinh (1994) の空間論に倣い、教員や学生など多様な構成員が集まるクラスルームをそのような空間とみなすこととした。

まず、英語圏で行われているアクティブ・ラーニングの促進とグローバル・コンピテンスの涵養を目指す教育に関する文献調査を実施した。次に、セルフィルミング (cellfilming) というビジュアル調査法 (visual research method) を採用し、スマートフォンのカメラ機能を駆使する映像制作プロジェクトを立ち上げ、熊本 of 大学生らとともにショートフィルムを制作した。2021 年には『A New Normal for Our Future (私たちの未来に向けたニューノーマル)』、2022 年には『Colorful (カラフル)』、2023 年には『Kumavel (Kumamoto+travel) (クマベル)』と題された短編映画を制作・上映し、観客にアンケート調査を行なった。また、制作プロジェクトに携わった学生から有志を募り、インタビューとアンケート調査を実施した。このような理論と調査方法を用いて、上記 3 つの問いについて探究した。

4. 研究成果

本研究では、Trinh (1994) の提唱する混成空間の理論を適用し、文献調査、アンケート、インタビュー、ビジュアル調査法などの複数の調査方法を組み合わせることで、3 つの問いについて多角的に考察した。

第一の問いである「大学のクラスルームで共同映像制作 (participatory filmmaking) はどのように実践され、その内容にはどのような特徴があるか」については、大学生と実施した映像制作プロジェクトがその実用的な回答事例となり得る。本研究の研究代表者とそのゼミナールに所属する 12 名の学生は、2021 年から 2023 年にかけて毎年 1 作品のペースでさまざまなテーマに関するショートフィルムを制作した。そこでは学生が主体となり、映画で扱うテーマや構成を話し合って決定し、半年から 1 年を費やして映像制作に取り組んだ。2021 年に発表した『A New Normal for Our Future (私たちの未来に向けたニューノーマル)』では、新型コロナウイルスのパンデミックにより大きな変化を強いられた学生生活や就職活動への不安と葛藤を、英語と日本語で表現するとともに、絵文字を用いて将来への展望を描いた。非接触というニューノーマルにより、撮影までの立案や話し合い、実際に撮影した動画の確認作業および編集はすべて遠隔で行うことを余儀なくされた。そのような中で完成した映像作品では、対面

による交流が当たり前であった過去への郷愁から、大きく変化する社会の中で戸惑う現在、そして希望のある未来へと場面が移っていく。2022年に発表された『Colorful (カラフル)』は、世界的なパンデミックにより浮き彫りにされた、困難な環境下の弱者や社会問題に観客の注意を引き寄せる。本プロジェクトも計画立案から映像編集、作品完成に至るまで、遠隔での作業を余儀なくされた。しかし、アメリカだけでなくさまざまな国々で広がりを見せた「ブラック・ライヴズ・マター (Black Lives Matter)」にインスパイアされた学生たちは、日常の風景に存在する多様な色彩をカメラで撮影し、文化や人種の多様性を見事に視覚化した。2023年に発表された『Kumavel (Kumamoto+travel) (クマベル)』は、実際に地震や豪雨災害に見舞われた熊本に住む学生たちの視点と声が反映された作品である。災害に関する報道では、被害の規模や被災者の状況が伝えられることが多いが、それとは異なり、本作品は紀行映画の形式を採用し、災害の影響を受けた場面だけでなく、熊本の歴史的・文化的な面をも描くことで、観客に旅をしているような感覚を抱かせることを意図している。これらのことから、本研究の研究代表者が学生の自主性を重んじ、意見交換を促すファシリテーターとしての役割を果たす一方で、プロジェクトに参加した学生たち自身が努力し協働することで、クラスルームには Trinh (1994) の提唱する混成空間が生まれ、観客に向けてメッセージを発信する映像作品の共同制作が可能になったといえる。

第二の問いである「英語と日本語の2言語を用いた共同映像制作により、どのように学生のアクティブ・ラーニングが促進され、グローバル・コンピテンスが涵養されるのか」についての解明には、インタビューやアンケート調査が有用であった。ゼミナールに所属する学生は多様性の理解や多文化共生の知識を深めつつ、英語コミュニケーションにも重きを置いており、映画を通してメッセージを幅広い層へ届けるため、英語のナレーションも担当した。『A New Normal for Our Future (私たちの未来に向けたニューノーマル)』(2021年)に携わった学生の間からは、「パンデミックにより激変した日常生活で体験した困難や未来への願いを、国内外の人々に映画を通して伝えることができ満足であった」「海外への渡航制限が緩和された際には留学や旅行をして文化交流をしたい」という声が聞かれた。また、『Colorful (カラフル)』(2022年)を制作した学生らは、「オンラインであっても、撮影した動画の共有や構成についての議論やナレーション・スクリプトの共同制作を通じて、ゼミナールの小規模なグループの中にも多様な視点や考えがあることが分かり、当然だと思われていた事象や社会問題に目を向け、なぜそれらが起きているのか、その解決策は何かを考えるようになった」など、学びの中で新たな気づきが得られたことを報告している。『Kumavel (Kumamoto+travel) (クマベル)』(2023年)については、パンデミックの状況が緩和したため対面での映像制作が可能となり、参加した学生はクラスルームでのコミュニケーションに積極的であった。完成した映画について意見を交換した際には、「自身の故郷である熊本を見つめ直し、考察を通して新たな発見があった」「熊本で育まれた文化を描くことで、国内外の観客が生まれ育った文化との相違が明らかになる」といった声が聞かれた。このように、新たな教育方法としての共同映像制作は、コミュニケーションを円滑にし、学生たちの自主性や気付き、発見を導く可能性があると考えられる。また、多文化共生を尊重しつつ自国文化を捉え、メッセージを英語と日本語で発信することのできる能力を涵養する効果があることが示唆された。

第三の問いである「完成した映像作品を上映することにより、どのように観客のアクティブ・ラーニングが促進され、グローバル・コンピテンスが涵養されるのか」について探究するうえで、アンケート調査の結果が参考になった。『A New Normal for Our Future (私たちの未来に向けたニューノーマル)』および『Colorful (カラフル)』はオンラインで、『Kumavel (Kumamoto+travel) (クマベル)』はクラスルームで、いずれも大学生を対象に上映し、有志に対してアンケート調査が行われた。調査結果では、「コロナ禍の学生生活における葛藤を共有できて勇気ももらい、勉学や就職活動を前向きに行う気持ちになった」「世界のさまざまな文化・人々が持つ多様性を尊重しながら自己を表現することが重要である」「熊本の持つ魅力をいろいろな国の人々に伝えていきたい」などの意見があった。このことから、学生が撮影・録音した映像・音声を結集した映像作品は、観客のアクティブ・ラーニングを促進しグローバル・コンピテンスを涵養するのに一定の効果が見られたと同時に、一人ひとりの自由な解釈を促し、まさに Trinh (1994) の提唱する混成空間を創造していたことがわかった。

本研究から生まれたショートフィルムは、国際ヴィジュアルリテラシー学会(2022年8月)、イギリス教育研究学会(2022年9月)、メディア・コミュニケーション・カルチュラルスタディーズ学会(2023年9月)などの国際学会で上映され、ビジュアル調査法を用いた新しい試みとして高評価を得た。本研究の一環として実施された共同映像制作プロジェクトは、高等教育における新たな教育実践例であり、アクティブ・ラーニングの促進とグローバル・コンピテンスの涵養に向けた教育に貢献しうると考えられる。今後は、グローバル人材の輩出に有益となるアクティブ・ラーニングとグローバル・コンピテンスについてのさらなる探究を目指す。そのためには、授業の中に映像制作などのクリエイティブな活動を取り入れた、さまざまな実践法とその効果について、さらに探っていく必要がある。

引用文献

文部科学省. (2014). 『平成 25 年度文部科学白書』. https://data.e-gov.go.jp/data/dataset/mext_20140912_1079

- Bean, J. (2011). *Engaging ideas: The Professor's guide to integrating writing, critical thinking, and active learning in the classroom* (2nd ed.). Jossey-Bass.
- Hara, H. (2018). *Arts-based education to become global citizens*. Kinseido.
- Meyers, C., & Jones, T. (1993). *Promoting active learning: Strategies for the college classroom*. Jossey-Bass.
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (2013). *The second basic plan for the promotion of education* (provisional translation).
<https://www.mext.go.jp/en/policy/education/lawandplan/title01/detail01/1373796.htm>
- Mizokami, S. (2007). *Active learning dounyu no jissenteki kadai* [Problems associated with the introduction of active learning]. *Nagoya Journal of Higher Education*, 7, 269-287.
<https://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/no7/16.pdf>
- Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD). (2018). *Preparing our youth for an inclusive and sustainable world: The OECD PISA global competence framework*.
<https://www.oecd.org/pisa/Handbook-PISA-2018-Global-Competence.pdf>
- Trinh, T. M. (1994). Other than myself/my other self. In G. Robertson, M. Mash, L. Tickner, J. Bird, B. Curtis & T. Putnam (Eds.), *Travellers' tales: Narratives of home and displacement* (pp. 9-26). Routledge.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Hiroko Hara	4. 巻 19
2. 論文標題 Collaborative Filmmaking for Communicating Diverse Voices of the Digital Youth	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 19th Annual Conference of Japan Society for Multicultural Relations	6. 最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Hara	4. 巻 1
2. 論文標題 The Pedagogical Possibilities of Online Collaborative Filmmaking in the COVID-19 Pandemic	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 熊本県立大学共通教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 53-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Hara	4. 巻 2
2. 論文標題 Practicing Online Collaborative Cellphilmimg towards Diversity	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 熊本県立大学共通教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 67-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Hara	4. 巻 -
2. 論文標題 Practising Collaborative Filmmaking for Inclusivity	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Arts for All: Exploring Inclusivity in Arts Education BERA Blog Special Issue	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Hara	4. 巻 30
2. 論文標題 Photovoice for Fostering Global Competence among University Students	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 熊本県立大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 13-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Hara	4. 巻 3
2. 論文標題 Visualizing the Hidden: A Digital Counter-Narrative of Natural Disasters	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 熊本県立大学共通教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 71-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Hara	4. 巻 -
2. 論文標題 Youth Participatory Cellphilmaking for Diversity	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Hawaii International Conference on Education Proceedings	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Hiroko Hara
2. 発表標題 Collaborative Filmmaking for Communicating Diverse Voices of the Digital Youth
3. 学会等名 The 19th Annual Conference of Japan Society for Multicultural Relations
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hiroko Hara
2. 発表標題 Practicing Online Participatory Cellphilmimg as an Alternative Mode of Teaching and Learning
3. 学会等名 British Educational Research Association Annual Conference 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hiroko Hara
2. 発表標題 Practicing Online Collaborative Filmmaking for Inclusivity
3. 学会等名 Arts for All: Exploring Inclusivity in Arts Education (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroko Hara
2. 発表標題 Online Collaborative Cellphilmimg for Diversity: An Arts-based Approach in the University Classroom
3. 学会等名 British Educational Research Association Annual Conference 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroko Hara
2. 発表標題 Online Participatory Digital Storytelling: An Alternative Way of Enhancing Visual Literacy in the New Normality of COVID-19
3. 学会等名 54th Annual Conference of the International Visual Literacy Association (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroko Hara
2. 発表標題 Youth Collaborative Cellphilmig: A New Approach in Humanities Education
3. 学会等名 21st International Conference on New Directions in the Humanities (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hiroko Hara
2. 発表標題 Cellphilmig the Hidden: A Digital Counter-Narrative of Natural Disasters
3. 学会等名 Media, Communication and Cultural Studies Annual Conference 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hiroko Hara
2. 発表標題 Youth Participatory Cellphilmig for Diversity
3. 学会等名 22nd Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------